西洋人の目からみた「鳴門の渦潮」

モートン常慈

はじめに

過去数百年の間、日本の「ゴールデンルート」([1]) 沿いに見られる数々の有名な歴史的及び文化的名所は、外国人観光客を魅了し、出版物に記述されてきた。名所には、日光の日光東照宮、東京の浅草寺、鎌倉大仏、富士山、京都と奈良のお寺の数々、大阪城や姫路城、広島の原爆ドーム、そして出島や長崎のその他の場所が含まれる。これらの場所は今までもこれからも、外国人観光客の「必見」リストに載り続けるであろう。しかし、なかなか紹介されずよく見落とされてきた場所が、四国と四国の名所の数々である。

四国は遠く、人跡まれなところであり訪れる価値がないとしばしば思われがちだ。しかし、1969 年に出版された日本の観光事業についての記事は全く違った見解を示している。「見過ごされてきた観光機会の著しい例は四国、‘最も開発されていない島’である。」そして、「四国を旅することは、先祖が“文明の発祥地”である京都奈良に達するために通ってきた地域を旅することである。」([2])数年後の 1971 年、アメリカ生まれの多作な作家であり日本学者のドナルド・リチー（1924 － 2013）は、四国がまだ現代性に侵略されていないことに深い満足を得た。彼は、いつか四国と本州を結ぶ橋が建設される可能性と、それが「ついに四国が観光客達のバス、うるさいスピーカー、子供達、車に酔ったおばさん達の群れで埋め尽くされる」ことへの心配を述べ、「四国は行くことが難しいため、まだいくらか日本人観光客から守られている。」と記した。([3])しかし、1985 年の大鳴門橋、1988 年の瀬戸大橋、1998 年の明石海峡大橋、そして 1999 年のしまなみ海道の完成で、四国は現在本州からバイク、車、バス、電車で簡単にアクセスすることができる。

橋や高速道路ができる前の 20 世紀初期は、四国に行くことが困難だったにもかかわらず、四国と島のいろいろな場所への観光旅行を促進する努力がなされた。1930 年代半ばから 1940 年代にかけて、日本交通公社が『How to See …』というシリーズの旅行小冊子を発行し、日本の様々な観光名所を紹介した。このシリーズは東京、京都、大阪といった比較的人気のある行きやすい場所だったが、あまり知られていない場所である『How to See Takamatsu』といった香川県高松市の場所を紹介する小冊子もあった。1936 年と 1947 年には、『How to See Shikoku』という出版物が発刊された。これらの小冊子の詳細については後述するが、これらの出版物のおかげで、世界中の人々がついに屋島寺、香川県の栗林公園、愛媛県の道後温泉、高知県の室戸岬、それから徳島県の鳴門市のわんわん凧や目を見張るような渦潮といった名所等を知ることができたのである。

鳴門の渦潮の人気と世界遺産運動

2000 年まで、外国人観光客が鳴門海峡と渦潮を見るには、徳島または淡路島側のどちらかの陸地もしくはチャーターボートからだった。同年の 4 月に、「渦の道」という大鳴門橋の橋桁下部に遊歩道が完成し、人々は鳴門海峡に向かって 500 メートル歩き渦潮を 45 メートルの高さから見学することができるようになった。実は遊歩道の床の一部がガラスのため、訪問客はこのすばらしい名所を真上から見ることができる。渦の道がオープンした最初の年には約 90 万人が訪れたが、年々訪問客が減っており、2014 年には約 50 万人となった。([4]) この減少にも関わらず、昨今のインターネット検索で「鳴門の渦潮」は 11,200 件を超えるビデオと併せて 372,000 件ヒットし、この人気現象が継続していることを示している。あるウェブサイトでは、下記のように述べられている。

> 「鳴門海峡の潮流は、イタリア半島とシチリア島の間のメッシーナ海峡、北アメリカ西海岸とバンクーバー島東海岸の間のセイモア海峡と並ぶ世界三大潮流のひとつである。現在、人々は鳴門の渦潮を世界遺産として登録することを目指しており、この運動は現在勢いを増している。」([5])

世界遺産として登録しようとするこの運動は 2014 年 12 月に始まり、兵庫県や徳島県の援助によって世界遺産登録推進協議会が作られ支持された。([6]) そしてそれからは鳴門の渦潮を調査し、日本と世界中で渦潮を宣伝する様々な活動が行われてきている。

現在、日本の世界遺産には 16 の文化遺産と 4 の自然遺産が存在するが、四国にはひとつもない。鳴門の渦潮は UNESCO の「自然遺産」のカテゴリーに所属されることになるが、世界遺産に登録されるために満たさなくてはならない重要な登録基準として、鳴門の渦潮が「顕著な普遍的価値」を有することを証明する必要がある。UNESCO が定義しているこの登録基準は、「すべての文化、地域、人々を受け入れ、少数民族、原住民および／または地元民族に由来するが故の顕著な普遍的価値の異なる文化的解釈を無視しない概念」とある。([7]) 日本における世界遺産登録に成功した場所の UNESCO に提出された推薦書を調べると、我々は登録がどのようにされたかを叙述することができる。「古都奈良の文化財」においては、「世間的な認識」と題する節に、「奈良の説明が下記の百科事典に載っており、多くの国で出版された観光ガイドで情報が入手できる」とある。21 冊の本が載っているが、引用はひとつも含まれていなかった。([8])２０１４年の「富岡製糸場と絹産業遺産群」においては、推薦書の６ページに「顕著な普遍的価値の説明書草案」が次のように記載されている。

「富岡製糸場と絹産業遺産群は、世界経済の貿易を通じた一体化が進んだ 19 世紀後半から２０世紀にかけて、高品質な生糸の大量生産の実現に貢献した技術交流と技術革新を示す技術的集合体である。その結果、世界の絹産業の発展と絹消費の大衆化がもたらされ、日本経済の近代化に大きく貢献した。」([9])

しかし、これらの資産についての外国人のコメントや、「顕著な普遍的価値」があるかどうかということについては、特定の参照文献がない点に注意したい。対照的に興味深いのは、富士山が「すべての文化を受け入れ」、歴史を通して普遍的に価値があることを支持するため、8 ページ（表２－４）に及ぶ「外国の人々から見た富士山」と題した説がある。特に、1690 年のエンゲルベルト・ケンペル (1651-1716)から、1933 年のブルーノ・タウト (1880-1938)まで、25 の外国人による富士山についての記述がある。これらはほとんどが英語だが、いくつかはフランス語、ドイツ語、イタリア語、スウェーデン語、そして韓国語の記述も見受けられる。([10])

本論文の目的は、鳴門の渦潮の「顕著な普遍的価値」を明らかに示し、西洋人が過去 300 年の間に鳴門海峡と渦潮をどのように記述したかについて考察することである。本論文は、陸地と海からの観察という二つの節に分かれている。第一部では、観光ガイドブックと軍事新聞からの引用に注目し、1930 年代の間の「重要な地帯」を説明し、地域の様々な地図を提供する。第二部では、海峡航海の歴史および航法本での渦潮についての言及について記載し、人々が「海の下の恐怖」についてどのように感じていたかを説明する。最後に、私はチャーターボートまたは観光ツアーボートでの人々の経験について説明する。それにより、人々が鳴門海峡を恐れ運航が困難だと感じる反面、渦潮を幻想的な光景であり、日本を訪れる際に見逃すべきではない場所だということを繰り返し記述していることが明らかになるだろう。

１．陸地からの観察

（1）ガイドブック

本節では、鳴門海峡と渦潮が英語やその他の外国語のガイドブック、観光案内本、そして軍事新聞を含む他の文献でどのように記述されているかを調査する。鳴門の渦潮への言及が最初に登場した文献はおそらく、ドイツ人博物学者、医師、そして探検家のエンゲルベルト・ケンペル (1651-1716)であった。彼は 1690 年から 1692 年の 2 年間の日本滞在中に、日本について広く書いている。彼が旅行中に実際にこの地域を訪れたかどうかは定かではないが、彼の書物の九州、大阪、および／または東京の間に、「The Japanese Sea and Its Two Whirlpools」と題した節があり、次のように記されている。

「危険で奇妙な渦潮が二か所あり、ひとつは長崎県島原の近くの早崎瀬戸であり、もうひとつは鳴門と呼ばれ、紀伊の国（和歌山県）から遠くなく阿波（徳島）の近くである。それ故、それは“阿波の音”を意味する阿波の鳴門と呼ばれる。（中略）その渦潮はぎょっとする光景だが、その恐ろしい音が遠くからよく聞こえ避けるのが簡単なため、危険だとは思われていない。」([11])

1870 年代と 1880 年代の航法本や日記にも渦潮についての言及があるが、西洋人による日本のガイドブックに載っているものは 1887 年まで見つかっていない。武信由太郎は『The Japan Year Book』で、「鳴門では、瀬戸内海と太平洋が交わる狭水道のひとつの渦と渦からの潮の流れは、独特の光景を生み出す」と述べている。([12]) のちに、イギリスの日本研究家であり数々の日本についての本の著者であるバジル・ホール・チェンバレンは、1901 年に出版した『A Handbook for Travellers in Japan』の中でこの渦潮について次のように記した。

「淡路島と四国を分け、瀬戸内海と太平洋をつなぐ鳴門海峡の激しい水流は不思議な場所である。それは本当に壮大な光景であり、絶対に見逃すべきではない。」([13])

1900 年代初期、日本では初めて「貴賓会」という外国人観光誘致機構が設立され、日本についての様々な出版物が作られた。1906 年に発刊された『A Guidebook for Tourists in Japan』には、貴賓会は鳴門の渦潮について「この幻想的な光景は毎月の初めに観察される。（中略）徳島はこの名高い鳴門の渦潮から約１０マイルの距離である」と記述している。([14]) のちの 1912 年に、この組織は今の JTB（Japan Travel Bureau）の前身である Japan Tourist Bureau へと発展し、外国人観光客の日本訪問を推奨し、彼らが日本にいる間確実に楽しい滞在をすることができるよう、さらに広範囲の仕事がなされた。この組織によって作られた資料は後で論述する。

鳴門の渦潮は、外国人作家または国内の観光協会らによって書かれたガイドブックや他の観光資料のみならず､海外の観光博覧会のために作られ配布された出版物にも含まれた。例えば、1915 年の 2 月 20 日から 12 月 4 日の間に米国のサンフランシスコで開催されたパナマ・太平洋万国博覧会（PPIE）である。このイベントの組織グループ、博覧会協会が出版した『Japan and her exhibits at the Panama-Pacific International Exhibition』の中で、この渦潮について次のように書かれている。

「鳴門の渦潮- 淡路島と四国の阿波の間にある狭水路は、ふたつの潮流が交わる場所である。（中略）この海峡は鳴門と呼ばれている。それはまるで、玄界灘と太平洋の海龍の戦地である。（中略）この壮大な光景を観察するためには、神戸港から遊覧船が出ている。」([15])

のちに、1922 年に英語と日本語で発刊された『Tourist』という雑誌には、次のように記述されている。「その島への旅行は 1 年のどの季節でもお勧めするが、もし鳴門の渦潮の壮大な光景を観察したいのであれば、初春が最適だと思われる。」([16]) そして 1930 年には政府が公式に介入し「国際観光局」を設立し、1933 年に『The Official Guide to Japan』を発刊し、次のように記した。

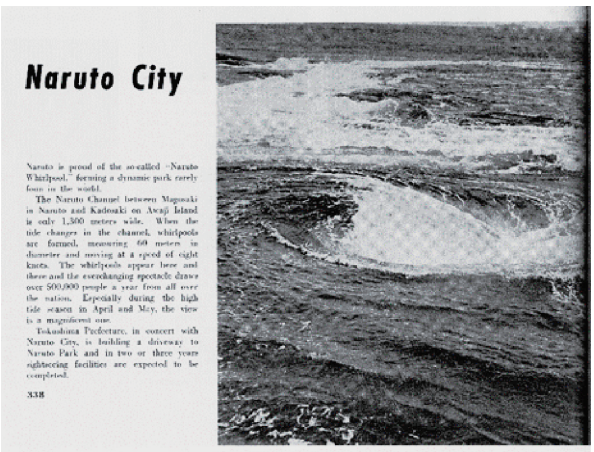
「阿波の鳴門は淡路島と四国をわける狭水路につけられた名前で、瀬戸内海と太平洋を結ぶ。（中略）渦潮を見るのに最適な場所は撫養町の沖にある大毛島である。」([17])

前述した 1936 年と 1947 年に JTB が出版した『How to See Shikoku』という旅行小冊子には、鳴門の渦潮についての特記がある。1947 年版の表紙には、渦潮のそばに座っている巡礼者が描かれており（図 1）、鳴門市とその見所についての記述が 41 行あるが、さらに大きい徳島市と市の名所については 17 行しかない。そのうえ 2 枚の白黒の渦潮の写真には、下記の説明が添えられている。

「四国と淡路島の間を流れる狭水路は、約 1 マイル幅で、潮流は特に大潮の時に物凄い力で流れ、憤る白く輝く渦を作る。従ってこの海峡は阿波の鳴門と呼ぶのにふさわしい。日本でこのような場所は他にはなく、まさに一見に値する光景である。」([18])

図 1　「How to See Shikoku」1947年発刊

1947 年に JTB が発刊したもうひとつの小冊子、『How to See Osaka, Kobe and Awaji Island』では、有名な鳴門の渦潮を見るには淡路島の洲本から福良へ約一時間移動する必要があると記している。鳴門遊園地からは、「6 時間毎に潮の満ち引きが起こり、訪問者はたくさんの巨大な渦潮の荒々しい運動の様子を見ることができる」と記述されている。([19]) 8 年後の 1955 年、もうひとつのガイドブック『New Japan』が発刊され、「Naruto City」及び「Naruto National Park”」と題した渦潮の重要な写真が 2 枚載せられた（図 2）。見出しには、「鳴門市は“鳴門の渦潮”と呼ばれ世界で滅多に見つからないダイナミックな公園を形成している。（中略）この渦潮はあちこちに現れ、この絶えず変わる光景は一年で 50 万人以上の人々を全国から惹きつける。」とある。さらに、「鳴門国立公園―鳴門海峡の渦潮は、世界の他の地域ではほとんど聞いたことがない現象である。」と添えられている。([20])



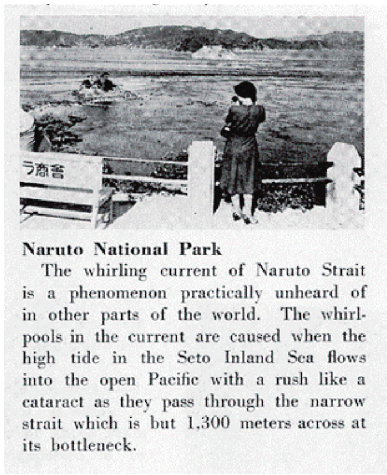
Naruto City

Naruto is proud of the so-called "Naruto Whirlpool," forming a dynamic park rarely found in the world.

The Naruto Channel between Magosaki in Naruto and Kadosaki on Awaji Island is only 1,300 meters wide. When the tide changes in the channel, whirlpools are formed, measuring 60 meters in diameter and moving at a speed of eight knots. The whirlpools appear here and there and the ever-changing spectacle draws over 500,000 people a year from all over the nation. Especially during the high tide season in April and May, the view is a magnificent one.

Tokushima Prefecture, in concert with Naruto City, is building a driveway to Naruto Park and in two or three years sightseeing facilities are expected to be completed.

338



Naruto National Park

The whirling current of Naruto Strait is a phenomenon practically unheard of in other parts of the world. The whirlpools in the current are caused when the high tide in the Seto Inland Sea flows into the open Pacific with a rush like a cataract as they pass through the narrow strait which is but 1,300 meters across at its bottleneck.

図２　New Japan　―鳴門市と鳴門国立公園

（２）軍事新聞

鳴門海峡とその渦潮への言及でもうひとつ参考になるものが、新聞や、第二次世界大戦後の占領軍のために発刊された他の文書でも見つけられる。例えば、1948 年 10 月 31 日の『Pacific Stars and Stripes newspaper』 (星条旗新聞)には、「Shikoku – remote and unspoiled – island of legend and beauty」と題した記事が書かれた。記者は次のように書いている。

「徳島県には多くの景観があるが、最も主要なものはおそらく徳島市から電車、バス、又は車で行くことができる鳴門海峡、またの名を鳴り響く門であろう。この鳴り響く

門は、徳島県の北東の先端と淡路島の間にある狭い海峡のことである。」([21])

のちの 1956 年、同新聞に二つの記事が発刊された。一つ目は 3 月 6 日に「Getting Away From It All」と題され、「福良は淡路と、日本列島主要四島のうち最も小さい島である四国を隔てる有名な鳴門海峡をすぐ渡ったところにある。この狭い鳴門海峡は、船と海岸の高い足場の両方から観察できる激しい渦潮で知られている。」([22]) それから一か月たたないうちの 4 月 14 日に、次の題と説明文とともに海峡の写真が載せられた。「Ancient Mysteries of Perilous Japanese Strait to Be Studied ―日本の鳴門海峡を通る船の船長を苦戦させる凄まじい急流と渦潮は、200 人の日本人専門家の大胆な探検隊によって調査されようとしている。（中略）近年、鳴門海峡は日本と海外からの両方の旅行者にとって必見となった。」([23]) 一年後の 1957 年 7 月 29 日、海峡での転覆船の記事が書かれる一方で、「危険な渦潮は主要な観光名所である」と指摘された。([24])

『Japan Today』の本にもう一つの言及を見つけることができる。1947 年に「日本で過ごしたことがある人々にとっては多彩な記憶の写真集として、そして、近い将来日本を訪問する予定のある人々にとっては、慎重かつ良心的に書かれたガイドブックとして」発刊された本である。([25]) 序節では「この本は主に日本の占領軍のために作られた。」とはっきりと書かれている。この本は 360 ページだが、90 パーセント以上が日本全国の観光名所の写真である。四国については 2 ページ、瀬戸内海については 3 ページが割かれ、下記図 3 の 1 枚を含む半ページ分の大きさの写真が計 6 枚、次の記載と共に掲載されている。「渦潮で有名な鳴門は、瀬戸内海と太平洋を結ぶボトルネックである。」

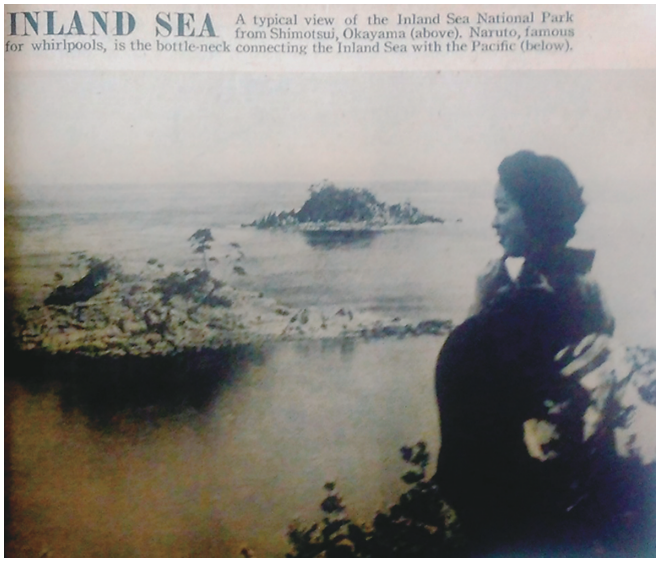


図 3　Japan Today「瀬戸内海」

（3）軍事戦略地域

1906 年から第二次世界大戦終戦までの間、渦潮を含むこの地域の周りは軍事戦略地域と考えられていたため、写真撮影、写生及び調査をすることができなかった。淡路島の南東側に由良と呼ばれる町があり、1889 年に淡路島と和歌山を隔てる紀淡海峡を守る軍の要塞建設が始まった。1896 年に由良要塞司令部が始まった。そして 1900 年には福良町に司令部としての砦が建設され、1903 年に鳴門要塞が由良要塞に加わった。淡路島の由良の軍施設に関する最も古い言及の一つが 1906 年に英語で出版された本で見つけられ、次のように記述がある。「日本の主要な港は湾の突端に横たわり、そこに通じる海峡はほとんどすべてが要塞化される。兵庫・神戸の港は、淡路島の由良要塞によって保護されている。」([26]) 従って軍事情報を外の周辺地域に漏らされるのを防ぐために、要塞は「防衛または戦略」地帯と呼ばれており、外国人のためのガイドブックにはそれらの地域で許可なしに写真を撮ったり写生をしないよう注意が記載されていた。きっと、鳴門公園と海岸線の辺りに次のような標識が掲示されていたであろう。（図 4）

図４　鳴門の警告の掲示

1914 年に発刊された T. フィリップ・テリー著書の『Terry's Japanese Empire … A Guidebook for Travelers』に、この制限についてのもう一つの言及が載っている。「旅行者は、鳴門海峡と友が島（淡路島南東部の由良海峡）の両方が要塞地帯にあるため、写真撮影および写生は陸軍省によって禁止されていることを覚えておくこと」と書いてある。([27]) 1925 年に JTB から発刊された『Pocket Guide to Japan』には、「Photographing, Sketching, etc.」と題した節があり、「写真撮影及び写生などは次の要塞地帯以外では自由に行うことができる。（中略）由良（和歌山、撫養、周辺地域及び淡路島を守る、大阪港の入口）」を含む。([28]) この注意書きは 1935 年の再発刊物にも同じ記載があったが、

今回は特に鳴門海峡について言及している。「観光客は、次の地帯以外の日本全国で写真撮影及び写生をすることができる。由良（和歌山、撫養及び淡路島の約半分を含む紀淡海峡及び鳴門海峡地域を守る、大阪港の入口。」([29])　そのパンフレットの地図には赤い丸で囲った要塞地帯が示してある（図 5）。

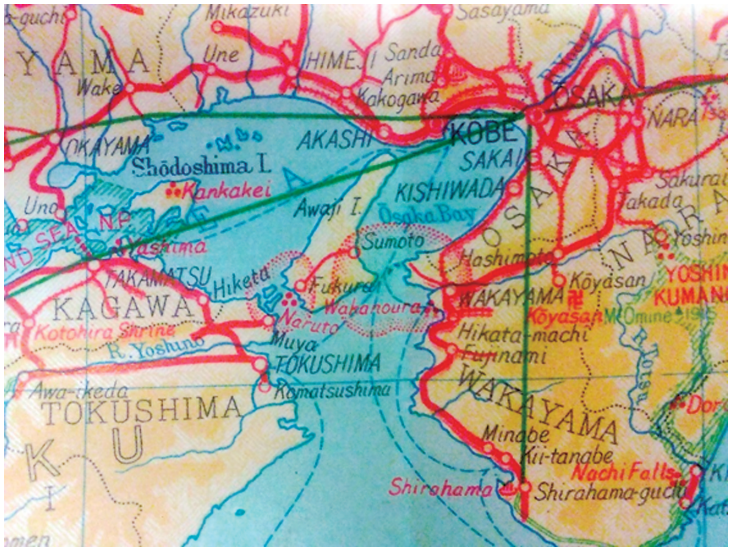


図５　Pocket Guide to Japan（1935年）

しかし、1930 年 4 月に『The Inland Sea – O.S.K Line』（大阪商船会社）という題で発刊されたパンフレットには、鳴門海峡はおろかその地域が「要塞または戦略地帯」だという記述は一切述べられていない。含まれていたのは、瀬戸内海と徳島県の航路と港停留所の地図である（図 6）。

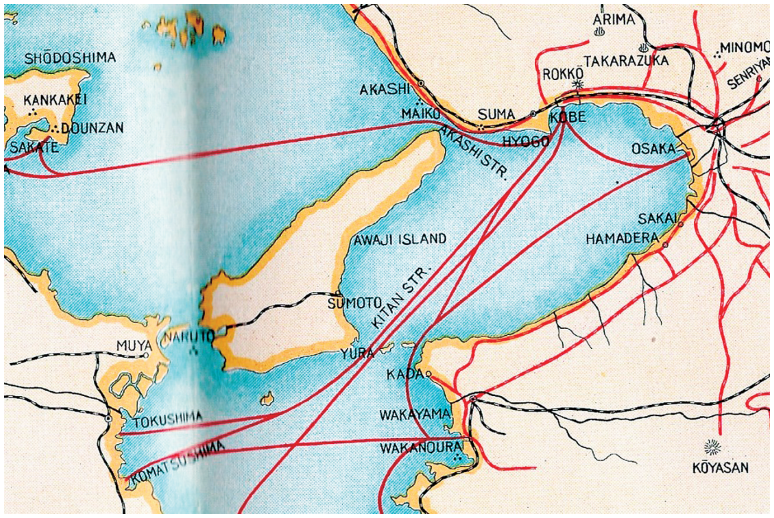


図６　瀬戸内海―大阪商船会社（1930年）

1934 年 6 月に同社によって発刊された同程度のパンフレット『The Inland Sea of Japan』は 1930 年のものと似ており、鳴門に関しての言及はなかった。（図 7）しかし、最後のページに観光客に向けて次の注意書きがある。「要塞地帯での写真撮影、写生及び写真撮影メモは厳しく禁止されている。（中略）違反者は罰金を科され、装置、メモその他は没収される。」

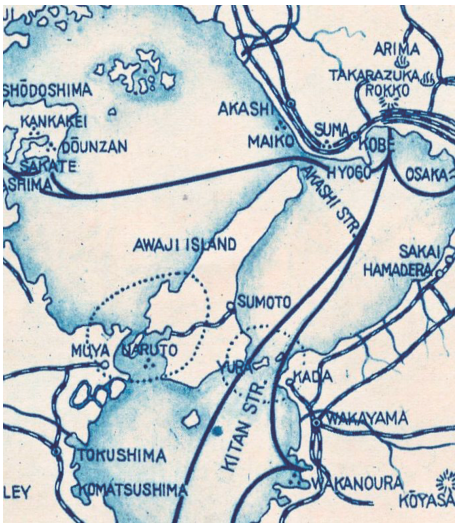


図７　日本の瀬戸内海　大阪商船会社（1934年6月）

前記二冊のパンフレットと違い、1932 年に日本国有鉄道によって発刊された『The Inland Sea of Japan』と題したパンフレットでは、鳴門海峡に関して次の説明をしている。「この有名な鳴門海峡の渦潮は、淡路島の南西にある福良より 4 メートル西の鳴門崎から見るのが最適である。特に大潮のとき、波はまるでとても狭い水路を急ぐようにうなり声を上げ、本当に印象的な光景で毎年多くの観光客を魅了している。」([30])　これは、規制がある中これらの場所を見に来続けている人が尽きることがなかったことを証明している。このパンフレットの最終頁には、折込みで「Sketch Map of the Inland Sea」があり、鳴門海峡は「Strategic zone」と印がつけられ、他のパンフレットと同じ注意書きがある。（図８）

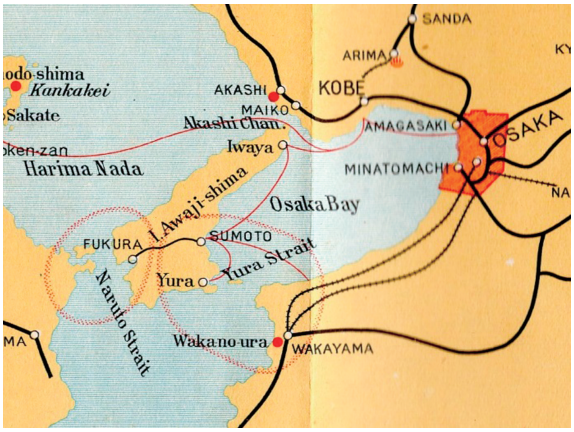


図８　「瀬戸内海」（1932年）

「○○の観光方法」旅行小冊子シリーズのもう一つのパンフレットである『How to See Shikoku』は、1936 年に JTB によって発刊された。JTB は東京、大阪、京都などの場所について 12.5cm×18cm、全 25 ページの小冊子を発刊した。四国やいくつかの小冊子は戦後に再発刊されたが、この 1936 年版の四国は鳴門が要塞地帯として示され、「撫養と、陸海両方を含めたすべての近郊は要塞地帯で、写真撮影及び写生などは厳しく禁じられている。」と書かれている。([31])　第二次世界大戦終戦まで鳴門海峡周辺での写真撮影及び写生などは制限されたが、写真が入手できなかったという意味ではない。実際、英語と日本語の見出し入りのポストカードセットが外国人観光客向けに売り出され、初期のポストカードには図９で分かるように由良要塞本部の「承認印」が押されていた。（題の左を注目）

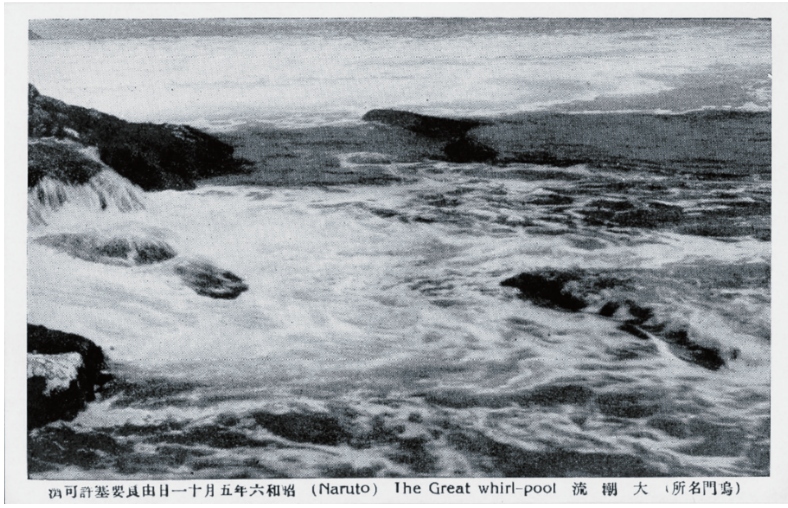


図９　「鳴門―偉大な渦潮」

これら 2 点はポストカードセットが入っていたパッケージの例である（図 10）。左の緑のパッケージカバー「Views of Naruto」は八枚の白黒のポストカードが含まれ、うち七枚は 1923 年 8 月、他一枚は 1931 年 6 月との日付印が押してある。これらすべては英語の見出しがあり、由良要塞本部の認証印がある。右にある「鳴門の景観」のパッケージカバーには、八枚の英語の見出し付のカラーのポストカードが入っている。前の所有者が書いた 1954 年 3 月 23 日という日付がパッケージの後ろにあり、このポストカードの古さの指標となる。これらのポストカードには「要塞の認証印」がない。

図10　ポストカード封筒収蔵品

下記（図 11）の例に見られるとおり、後に発行されたポストカードのセットには、見出しとポストカードの質に少し変化がみられる。左の例は 1950 年代半ばかそれ以前に発行されたものである。右の例は光沢があるコーティングと、より目立つ緑と青の色彩だ。また、左の英語の見出しは「National Park – Naruto」(国立公園鳴門)と書いてある。この地域は 1950 年 5 月にこの名前が付けられた。

図11　「時間と渦潮を観察するボート」のポストカード

結　論

本節では、私は 1690 年から 1955 年の間の旅行ガイドブック、資料、及び第二次世界大戦後の西洋人占領軍のために作られた書類に載っていた鳴門の渦潮に関しての記述を提示した。また、私は 1930 年代から 1945 年までにその地域が要塞地帯または居住禁止地域として考えられたための参照数の結果を示した。これらの例を調査すると、渦潮を表す形容詞や語句を次のように識別することができる。―恐ろしい音、奇妙な活動、本当に壮大な光景、見逃すべきではない、幻想的な光景、壮大な光景、物凄い力、憤り、見るべき光景、荒々しい運動、絶えず変わる光景、感激的な光景、世界の他の地域ではほとんど聞いたことがない現象－。鳴門海峡や渦潮を説明するのにこのような用語を使用したことから、西洋人はこの場所を「顕著な価値」があると思っていたことが明らかだと証明される。

２．海からの観察

第二部の本節では、海から見た鳴門の渦潮がどのように記述されてきたかを三部構成で説明する。パート A は三つの細区分を含む。１．鳴門海峡の最も初期の航海用地図、２．鳴門海峡内を移動することの難しさ、３．日本人の間で信じられている海の下の怪物の存在を含む鳴門海峡にちなんで付けられた船の名前。パート B の二つの細区分では、次の事柄を説明した。１．チャーターボートツアーと個人の船旅、２．宣教師が見た渦潮。最後にパート C では、鳴門海峡と瀬戸内海観光ツアーがどのように渦潮を観察してきたかについて調査する。

A（1）：航海用地図―

最初に鳴門海峡を調査し航海用地図を作成した西洋人は、19 世紀半ばのチャールズ・ブロック司令官 と W.F. マクスウェル中尉である。ブロックは 1861 年に HMS Dove で、([32]) マクスウェルは 1869 年に渦潮に接近した。([33]) 実際、1869 年にマクスウェルによってこの地域の最初の航海用地図が描かれ、British Admiralty Publications（英国海軍本部出版）から「Naruto Passage No. 119」が出版された。地図の原物は見つかっていないが、下記のとおり、地図のコピーは米国海軍水路部によって 1904 年に出版された。この地図は「The Inland Sea Eastern Entrance – Naruto and approaches」と題し、下記の記述が含まれている。「1900 年の日本の調査（1869 年の英国の調査の追加）。」1925 年、1932 年、そして 1940 年に微修正が加えられた。地図には海岸沿いの都市や水路の名前、灯台、ブイの位置、および尋による水深が含まれている。結果として生まれた地図は、大半がマクスウェルの地図に基づいたものであった。（図 12）。

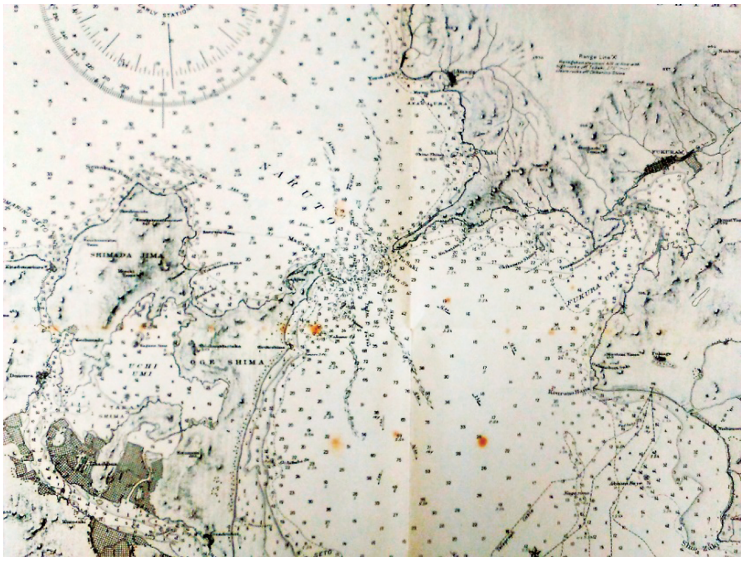


図12　瀬戸内海東入口—鳴門と接近法地図（1904年）

米国海軍水路部によって作られた鳴門海峡のもうひとつの地図は、「Japan – Naikai or Inland Sea: Izumi Nada and Harima Nada」と題し、1912 年に初めて出版されたが、後の 1942 年に修正が加えられた（図 13）。([34])

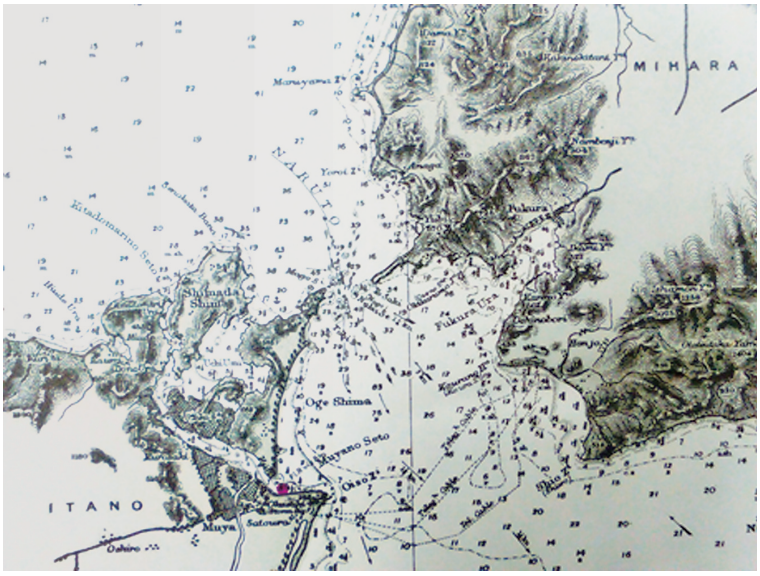
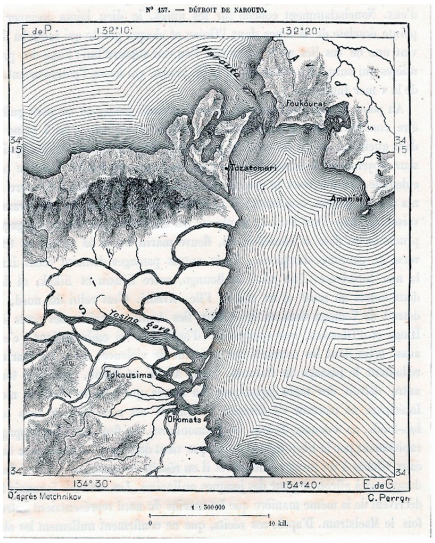


図13　日本—内海　泉灘と播磨灘地図（1912年）

マクスウェルの地図作成の直後、1876 年、フランス人、エリゼ・ルクリュ (1830-1905) がとても基本的な鳴門海峡の航海用地図を作った。この地図は、米国海軍水路部によって作られた地図（図 14）に比べ、海峡の深さなどの詳細に欠けていた。



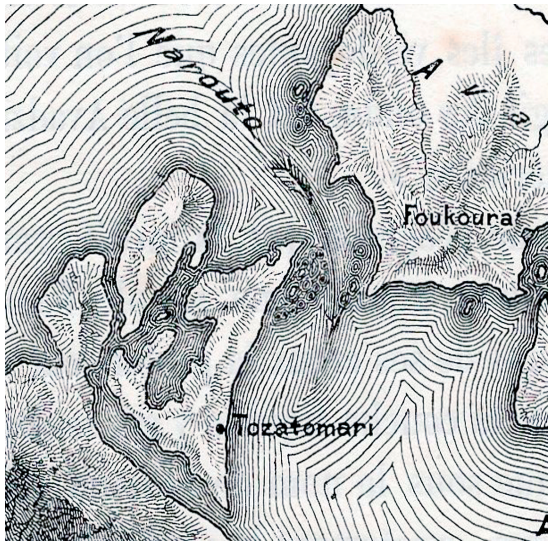


図14　Detroit de Naruto（鳴門海峡）地図―（1876年）

A（2）航行の難しさ

いろいろな地図の作成で、多くの人々は、本や他の出版物に鳴門海峡を航行することの難しさについて書き始めた。1870 年にアレキサンダー　G.フィンドリーは次のように記している。「以前それは渦潮だと考えられており、急流の衝動によって荒れ狂う波の中でジャンクが沈没したり、急流の衝動によって岩にぶつかりバラバラになったりしたのは、この危険な性質が起因していたというのにはしっかりとした理由があった。」([35])　3 年後の 1873 年に『The China Sea Directory』の中で、鳴門海峡についての長い文章があり、それは 1861 年と 1869 年のブロックとマクスウェルによる航法を参照している。その引用の一部はフィンドリーの本と全く同じ文章である。1878 年に、フィンドリーは『A Directory for the Navigation of the Indian Archipelago, China』を出版し、鳴門海峡を横断するのに最適な時間に関して読者に教えるが、それが悪天候の中で試みるべきではないと警告している。([36])　そして 1874 年、エメ・アンベールは『Japan and the Japanese – Illustrated』の中で次のように記している。

「有馬海盆から大海原へ直接繋がる鳴門の水路は、前者より短いが、それは頻繁には通ることがない。なぜならそれは高い船には危険な水路であると考えられているからである。その水路に打ちあがる荒波は、もっぱらその猛烈な海流のせいである。」([37])

1876 年、エリゼ・ルクリュは、フランス語で『Nouvelle géographie universelle: la terre et les hommes Vol 7 (p722) Impression à l'identique de l'édition d'origine』を

出版し、1891 年にこれを訳した『The Earth and Its Inhabitants: Asia』が出版された。この中で彼は、次のように述べている。「鳴門海峡は日本の他のどの海よりも恐れられている。」([38]) 1889 年に、もう一人のフランス人、E. ドゥ・ヴィラレは『Dai Nippon』の中で次のように書いた。「狭い鳴門海峡は、驚異的な流れと渦のためほとんど通ることができない。」([39]) そして 1910 年、ジョセフ・ヘンリー・ロングフォードは『The Story of Old　Japan』の中で、淡路と四国の間の鳴門海峡の激しい水流を通ることは、現代の水夫にとって恐怖である。」と記した。([40])

A（3）船名と海の下の怪物

ある船は「鳴門」と名付けられた。1935 年の『The Travel Bulletin』の中で、「Zoku Senmeiko – Nomenclature of the N.Y.K. Fleet Supplemented.」と題した記事がある。N.Y.K とは日本郵船株式会社の略で、世界で最も古く大きい船会社のひとつである。その記事の中で著者は N.Y.K の貨物船はどれも「N」から始まる名前に統一されていると説明した。そのひとつは「鳴門丸」と言い、著者はこの貨物船について次のように主張した。

> 「この貨物船の名前は淡路島と四国を分け、瀬戸内海から太平洋の門のひとつを形成する狭い海峡の名前からとった。（中略）鳴門の「なる」は「鳴る」、「と」は「門」であるが、「鳴る」は雷などの大きな騒音に対し使われ、潮流が怒りの渦を急流し、かなりの騒音を引き起こすので、この狭い海峡には「轟音をたてる門」という名が適している。（中略）この荒浪は、福良町から完全に安全に訪れることができる。（中略）離れて見るこの光景は並外れて美しい。（中略）私はこの渦潮の存在を説明する面白い神話を、まだ見つけることができていない。」([41])

鳴門の渦潮の神話的起源がないにしても、多くの人々が、渦潮には怪物が潜んでいて船を壊し人々を波に飲み込ませると信じていたことは明確である。ヨハネス・ユストゥス・ライン（1835 － 1918）は、1884 年に次のように記した。「阿波の鳴門はカリブディスのようで、日本語の説明によると、“海水は丸く渦を巻き、岩にぶつかることでまるで千の雷が鳴るように轟きを引き起こす”。」([42])　約 10 年後の 1914 年、フィリップ・テリーは『A Guidebook for Travelers』の中で次のように記した。「島の南西部の最も外側の岩の島と隣接した四国の間には名高い鳴門水道があり、日本のカリブディスとして恐れられている。」([43])　ギリシャ神話では、イタリアのメッシーナ海峡の両側に海獣がいると信じられている。そのうちのひとつ、カリブディスは、膨大な量の水をのみこみ渦を引き起こし、船を危険にさらすと言われた。1939 年の記述ではわずかに違う比較がされた。

「海や滝の下の渦巻は、人生のシンボルである：動揺、混乱、そして争い。しかし、それらはよく美しいものとして単一化される。それらは海獣王国の入口の門、または太陽礼拝と（淡路島近くの）鳴門の渦潮を間接的に関連付けられる。」([44])

もう一つの海獣についての言及は、1953 年頃、アメリカ人、ウィリアム・プライスとその妻が鳴門の渦潮を船から見たいと言ったが、海の底には河童がいて船を引っ張ると何度も警告されたそうだ。([45]) 最初に彼らは「瀬戸内海の最も劇的な現象の一つ」を見逃してはならない、なぜなら「この光景を見るために毎日日本人観光客を乗せているこの汽船からその渦潮を見ることができるからだ」と言われた。([46]) 彼らは汽船に乗ったが、「その日は海が荒れているので渦潮に近づけない」と言われた。しかし彼らはそれでも行くことを決めた。結果、波は船首に打ちつけデッキに水が乗り上げたが、「海峡に達したとき、波は奇跡的に消え、キャプテンは心変わりしコースを変え、我々は海峡を渡った。」彼らが近づくにつれ、「渦巻く怪物を遠くからのみ見ることができた」と著者は記している。([47]) “「汽船は海峡を航行することはせず、端を通るだけで、鳴門町へ戻った。」そして彼らはその小さいチャーター船の船体が海峡内を操縦することができたかどうかを議論した。彼らは海峡を案内するガイドを見つけ、次の日の朝に出発したが、「渦潮が船をとらえ、船は酔った男のようによろめいた」、([48]) そして「船は動くのを止め、前にも後ろにも動くことができなくなった。」著者は続けた。「私達が実際に渦潮の中にいて、渦潮が船を渦巻の中心へ向かって刻々と冷酷に運んでいることに気が付くには、少し時間がかかった。」([49]) 彼らは油が半分入った大きな鉄のドラム缶を放し「渦の完全な回転を混乱させる」ことで、やがて渦潮から抜け出すことができた。「河童は固い決心で船を沈ませようとしたが、船はいつも再び浮かび上がった。」([50]) 渦の力が尽きてくると、エンジンは海流に打ち勝ち、（中略）そして私たちは最後の早瀬を振り切り囲まれた入江に入った。」([51]) 彼らは、「それは渦潮の問題だけではなく、海流の下には悪魔がいた」と言った。日本に伝わる迷信のひとつとして河童があり、喜んで水中の墓に人間を引き降ろす凶悪な人魚または水ゴブリンの種だと信じられている。鳴門海峡に関する記事の見出しには、「瀬戸内海に慣れた水夫は 1 マイルに渡る水路を避けて通る。鬼が人々を海の底に沈ませるという迷信が信じられている。」([52])とある。

B（1） チャーターボートツアーと個人の船旅

会社による観光ボートツアーができる前は、1950 年代半ばの米国の Price 夫妻のような外国人観光客は、鳴門海峡と渦潮を訪問するためにボートと船員を雇った。1884 年、ある西洋人は人力車で淡路島の福良町に着き一夜を過ごすと、次の日に渦潮を観察した。

淡路島と四国を分け、瀬戸内海と太平洋をつなぐ鳴門海峡の激しい水流は見所である。それは壮大な光景で、特に大潮の時はどのジャンクも水路を渡ろうとすることができない。そしてこれは絶対に見逃されるべきではない。ボートは福良の旅館の所有者によって相応な代金で提供される。（中略）航行には 4 ～ 6 時間かかる。([53])　1892 年、ロバート・S・ガーディナーは著書『Japan As We Saw It』で、彼自身の 4 か月の「踏み慣らされた道や人跡まれなところ」への旅行の間に一度鳴門海峡を訪ねたと書いた。([54])「Islands of Awaji and Shikoku」と「The Inland Sea」の章では、「福良で私達はボートと船頭を頼み本州の海岸沿いに連れて行ってもらい、そこから淡路島と四国を隔てる鳴門海峡の凄まじい水流を見ることができた。」と記している。([55]) 1894 年、同様にヘンリー・ダベンポート・ノースロップ（1835 － 1909）は、鳴門海峡を航行したときの印象を次のように記録している。「私達はやっと海峡の門を見た。左側には松の木に覆われた岩があり、淡路島の正面より、右側には孤立した岩、または島があり、またいくつかの松があり、シコフ（四国）の島の正面を形成している。（中略）その水路に打ち上げる荒波は、もっぱらその猛烈な海流のせいである。([56]) 二年後の 1903 年、『Up-to-date Guide for the Land of the Rising Sun』では、次の記述が見つかった。

> 「鳴門の渦潮は、福良の西にある鳴門岬と阿波の北東末端の間にある同名の海峡にある。水路の距離は一マイルだけである。渦潮に行くのに最適な方法は福良から小船に乗ることだ。大きな沈んだ岩に対しての水しぶきと渦巻の雷のような音は、見る価値がある光景だ。」([57])

二十年後の 1914 年、『The Netherlands and Japan – Japan of Today』の著者は次のように述べた。

> 「南海の景色の中で、鳴門は最も衝撃的である。この壮大な光景を目撃したい観光客は、淡路の鳴門崎か、鳴門海峡に横たわる小島、大毛島の孫崎に行くべきだ。徳島から船に乗り北へ約十マイル航行することもできる。渦潮は一つになったり離れたりして、無限の様々な素晴らしい光景を生み出す。この壮観は潮が満ちたときが最高である。」([58])

B（2）　宣教師が見た渦潮

鳴門海峡を航海したり船で渦潮を見たのは観光客だけでなく、キリスト教の宣教師も、四国や淡路島での布教活動や集会のための訪問の際に島へ行く途中で渦潮を見ていた。

1859 年、ジェームス・カーティス・ヘボン博士(1815-1911)は最初の長老教会の宣教師として日本に来たが、1871 年の明治維新で信教の自由が紹介されてから、すべてのキリスト教グループが迫害または逮捕を恐れずに布教活動をすることができるようになった。ほとんどの宗教グループとその宣教師達は本州で活動に励んだが、やがて彼らは淡路島や四国のようなさらに離れた場所も訪問するようになった。一例として「The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts（SPG）」の H.J.フォス牧師は、1878 年に初めて淡路島のいろいろな村落を訪問した。数年後、牧師は淡路島を再訪し、洲本町で説教に参加した後、二人の聖職者と共に福良へ行った。そこにいる間、彼は鳴門海峡を訪れた。

「午後に、我々は日本の船に乗り、福良が位置する陸地に囲まれた美しい湾の終わりまで行った。入口の丘からは海と陸地の美しい景観が見渡せる。福良は三角形の島の南西端部にあり、四国に近い。その二つを隔てる海峡はとても狭く危険で、かなりの範囲の渦潮をたびたび見ることができる。」([59])

1899 年、南東京の主教のエドワード・ビカステスは、徳島での集会訪問の後、福良に行く途中に渦潮を航行した。

「私は約 10 マイルの距離を人力車に乗って海岸に向かい、そして帆船に乗って四国の北東にある淡路島を通った。途中で私は有名な渦潮を見に行き、非常に波立つ狭い水路の近くの岩が多い島から絶景を得た。私はジャンクが二隻通り抜けるのを見たが、そのうちひとつは海流によって二回完全に巻きつけられて、そして、相当な速さで道を急いだ。水の力は岩場を避けて船を運び、特に危険なようには見えない。その日はすばらしく快適で、私達は順風に乗って福良へ航海した。」([60])

数年後の 1891 年、イギリス人聖職者、聖書研究家、旅行家のヘンリー・ベイカー・トリストラム(1822-1906)は徳島を訪れ、『Rambles in Japan – The Land of the Rising Sun』（1895 年出版）の中で、鳴門旅行について次のように記している。

「ある一日は、12 マイル離れた大きな広がった町である撫養で、海岸に沿い有名な鳴門海峡を目指す楽しい探検に費やされた。私達六人のグループは、二人の男が縦に引っ張る車にひとりずつ乗せられた。それは美しい道のりだった。それは賑やかな情景だった。私たちは日本の見所の一つである鳴門に着いた。そこは瀬戸内海を流れる

潮が北からの潮と出会う場所だ。」([61])

C（1）観光客のためのボートツアー

今日、四国や淡路島への訪問者は、渦潮を近くで見るためにいくつかのボートツアーから選ぶことができる。いくつかは徳島側で、その他は淡路島の福良町から出発する。1947年のボートツアーや観光クルーズに関する初期の記述は、次のように記している。「鳴門は速い水流と巨大な渦潮で有名だ。海峡の速い流れが世界三大潮流のうちのひとつであると言われているため、興行主達は観光客のために有名な鳴門海峡でクルーズを始める予定である。」([62])　しかし、そのようなクルーズの初めての確実な証拠は、この場合福良町からで、1959年に明確に記してある。

「洲本市から福良の小さな町まではバスまたは電車に乗ることができ、そこは有名な渦急流がある鳴門海峡への観光ツアーのための遊覧船が毎日出発している。渦潮は四国と淡路島によって作られる狭い海峡の起伏の多い水底を通過することが原因である。」([63])

1961年の『Official Guide of Japan』では次のように記してある。「撫養－塩で知られる町は、鳴門海峡の潮の流れが変わるときに作り出される渦潮の景観で有名だ。」そして、「一般に阿波の鳴門と呼ばれる鳴門海峡は、（中略）近くで渦潮を見るための船が一年中利用できると同時に、水路の中へ突き出ている岬の先端の高い足場から水路とその近郊を広く眺めることもできる。」([64]) 1966年に再版されたこのガイドブックでは、非常に似た記述がある。「鳴門地域は鳴門海峡の潮の流れが変わるときに作り出される渦潮の景観で有名だ。（中略）近くで渦潮を見るための観光旅行用の船は、一年中利用できる。」([65]) 1970年に、「New Japan」と題した本の中で、鳴門の渦潮が観光客の間でどれだけ人気スポットになったかを示す記述がある。

「観光について、「必見場所」のひとつは鳴門の渦潮であり、潮が瀬戸内海から狭い鳴門海峡へ流れるときにおこる現象である。渦潮は四月と五月が一番素晴らしい。（中略）鳴門は国際的に知られた観光都市で、「ウズシオ」と呼ばれる鳴門海峡の渦潮で有名である。毎年 250 万人以上が鳴門海流を流れる潮を見にこの街を訪れる。渦潮を近くで見るための船は一年を通じて利用できる。」([66])

そしてまた 1975 年に追記がされ、「鳴門海峡のもう一つの壮大な眺めは、鳴門公園北

の千畳敷からリフトで三分登ったところにある鳴門の丘から見ることができる。駅からバスで五分、一部へ三十分または福良へ一時間の岡崎岬からフェリーボートでも行くことができる。([67]) このルートは日本の地図でも示されている。（図 15 の点線に注目）

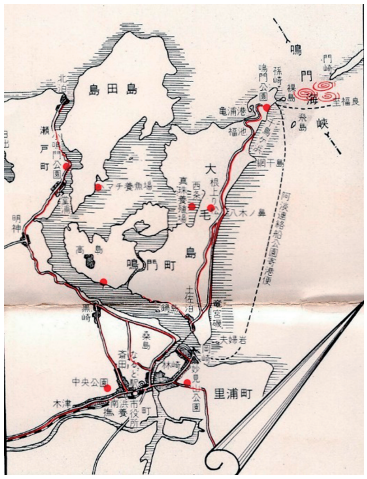


図15　岡崎から鳴門海峡へのフェリーボートのルート（点線）

C（2）瀬戸内海ツアー

海獣が潜み人々を引っ張るという渦潮の怖い恐ろしいイメージにも関わらず、瀬戸内海は穏やかな場所として推奨されている。瀬戸内海に面している 11 都道府県は、1934 年に瀬戸内海国立公園を作り、それ以来観光会社は大阪から九州への水路に沿ったツアーを促進しようとした。いくつかのパンフレットには、鳴門の渦潮についての具体的な記述がある。1925 年にニューヨークのジャパン・ソサエティーが出したニュース速報に、瀬戸内海の見所と鳴門海峡についての記述が見つけられる。ジャパン・ソサエティーは 1907 年に「理解、感謝および協力を通じ、日米の人々をより緊密につなぐ」ために作られたが、1941 年と 1952 年の間は閉鎖された。([68])　「瀬戸内海―　淡路島と四国の間には恐ろしい鳴門海峡があり、憤る海が大きな轟音を立てて猛烈な海流が潮を運ぶ。この感激的な光景は、神戸から約八時間の旅で、鳴門公園から見るのが最適である。」([69]) 1953 年、『The Seto Inland Sea – Japan`s World Famous National Park』が出版され、多くの瀬戸内海と周辺市町の写真を含んでいた。「徳島県－壮観な鳴門の渦潮」と題した節で、軍事基地が消えて以来物事がどう変わったか、渦潮がいろいろな人々にとって「お気に入り」になったかを記述し、それは本当に感動的なことだと主張している。

「徳島県（阿波）の観光客の旅程の中で最初にくるのは、瀬戸内海国立公園の鳴門の素晴らしい渦潮である。渦巻く潮で有名で、鳴門の要塞がなくなった今、ここは観光

客にとっての見所に変化し、鳴門は観光産業でより重要な役割を担うこととなった。鳴門の渦潮は、詩人、歌手、絵描きにとって分析能力への挑戦状となり、最近では写真や映画にお気に入りの被写体になった。渦潮の真の姿を知ることは明らかに難しく、ほとんど不可能である。それは単に画趣に富みすばらしいだけでなく、きっと、独特のインスピレーションを持っている。」([70])

これらは鳴門海峡、鳴門の渦潮、そして鳴門公園の見出し付きの写真二枚である。ひとつの見出しには、「鳴門海峡は大毛島の北東末端の孫崎と、淡路島の南西端部の門崎の間にある。(中略)鳴門海峡は速い潮で有名で、最も素晴らしい光景だ。」もう片方には(図 16)、世界的に有名な鳴門海峡の壮大な渦潮は、淡路島の福良と四国の鳴門の間にある。(中略)福良は有名な鳴門の渦潮に一番近く、楽しむのに最適な場所である。」そして鳴門公園の見出しには、「鳴門公園（中略）は、鳴門海峡の最高の眺めを見渡せる。公園では、200 ヤードほどの高さの小さな丘の上に「千畳敷」として知られる平地があり、そこから世界的に有名な渦潮の印象的な景観を楽しむことができる。

図16　淡路島福良より鳴門海峡を望む

六年後の 1959 年、「瀬戸内海―関西線」と題したパンフレットが関西ラインによって作られた。パンフレットには、関西ラインのツアーで乗客が経験することができる観光機会についての全体的な説明がある。それには、「人によって作られた京都と奈良の栄光を見た後に、船に乗ってリラックスして、不思議な自然の中を呑気に旅して、日本列島の主要三島を見ることほどいい対照が他にあるだろうか。（中略）のどかな八島から荒れ狂う鳴門の渦潮まで。」このパンフレットは鳴門の渦潮の説明と写真が載っている。(図 17)

「淡路島から四国を隔てる狭い海峡は、世界で最も変わった光景のひとつである。こ

こでは一日に二回、太平洋の水が陸地に囲まれた水路を分け入り、そして出ていくときに、瀬戸内海の平和は損なわれる。時に 5 フィートにも達する海流の両側の海面の高さの違いから生まれる猛烈な渦潮の様子を、あなたは安全で快適な船から見ることができる。陽がさんさんと降り注ぐ日には白い泡が輝ききらびやかで、曇りの日は荒く驚異的である。」

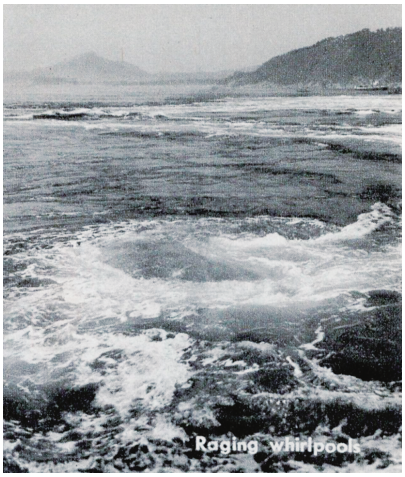


図17　瀬戸内海（1959年）

関西ラインは 1960 年にもうひとつのパンフレット『Map: The Inland Sea of Japan (Seto nai kai) – Kansai Line.』を発行し、それには、彼らのツアーは「小島から小島へ、港から港へ、豪華ホテルのような快適さで、まるで自分自身のヨットでクルージングしてるかのようにのんきに」と書いてある。加えて、「このツアーは日本列島主要三島を巡り、景観を見ることができる―美しい宮島、荘厳な阿蘇山（世界で最も壮大な火山の一つ）、穏やかな屋島、憤る鳴門の渦潮、小豆島の花々、別府の地獄。」

結　論

本論文の第二部では、私は西洋人が海から見た渦潮をどのように記述したかを提示した―宣教師を乗せた船、チャーターボート、そして観光遊覧船である。1860 年代半ばに最初の地図が作られてから 1960 年代の最新の参照までを見ると、西洋人が鳴門海峡航行の難しさを知っていて、鳴門の渦潮がカリブディスの類であり、おそらく、渦潮にはその渦巻の中に船を引きずり込もうとする日本独自のその他の海の怪物が居ると信じられていたこともはっきりと知っていたことが明らかである。「激しい、恐怖の、憤る、猛烈な」といった形容詞が頻繁に使われたが、渦潮を目撃した西洋人の畏敬の念を表すのには「壮大

な、名高い、有名な、感激的な、印象的な、素晴らしい、見る価値のある」などの他の言葉も使われた。

結　論

本論文は過去 300 年の間に、西洋人が鳴門海峡と渦潮をどのように記述したかを考察した。本論文は第一部で陸地からの観察、第二部で海からの観察を調査し、この場所がどのように記述されたかが簡単にわかる。第一部では、恐ろしい音 (1690), 独特の光景 (1887), 壮大な景観 (1901)(1915)(1922), 見逃すべきではない (1901), 幻想的な光景 (1906), 海龍の戦地 (1915), 本当に印象的な光景(1932), 見るべき光景 (1947), 景観 (1948), 珍しい現象 (1955), 観光客にとって必見 (1956), 主要な観光名所 (1957)などの言葉や語句が使われた。そして第二部では、危険な性質 (1870), カリブディスの類 (1884)(1910), 試みるべきではない(1878), 危険な水路 (1874), 驚異的な流れと渦 (1876), 壮大な景観 (1884) (1914), 激しい水流 (1894) (1910), 雷のような音(1903), 見る価値がある (1903), 恐れられている (1914), 憤る海 (1925), 感激的な光景(1925), 怒りの渦 (1935), 海獣王国の入口の門 (1939), 有名な渦急流 (1947), 劇的な現象 (1953), 素晴らしい光景 (1953), 有名な (1953), 渦巻く怪物(1953), インスピレーションを与える (1953), 最も変わった光景 (1959), 憤る (1960), 必見の場所(1970)などの言葉が使われた。鳴門海峡の渦潮は恐れられてきたが、神秘と畏怖の場所とみなされ、雷音と共に怪物の住むような場所だと思われ、何世紀もの間、不思議で、壮大で、眺めがよく、インスピレーションを与える、必見の場所として、繰り返し記述されてきた。本論文は、初めて、鳴門の渦潮が、1690 年のエンゲルベルト・ケンペルによる最初の言及から今日に至るまで、西洋人によって価値ある場所として扱われてきたことを明確な詳細を挙げて明らかにした。本論文「西洋人の目から見た鳴門の渦潮」の考察は、鳴門の渦潮を世界遺産として登録させるために必要な「顕著な普遍的価値」という基準を満たす、明らかで間違いない証拠を提示している。

注

1 http://www.japanspecialist.co.uk/semi_escorted_tour/japans-golden-route- 7-days/ Here is an example of a 7-day tour by Japan Travel Bureau entitled "Japan`s Golden Route" that includes visits to Tokyo, Mt. Fuji, Kyoto and Nara. Other tour companies include visits to Nikko, Hakone, Hiroshima and Osaka. Accessed December 27, 2016.

2 Rowland G. Gould, "Imaginative Tourism to Match the Jumbo Jet Age." Asia Scene 14(9), 1969, 143-145.

3 Donald Richie. *The Inland Sea*. Tokyo: Kodansha, 1971. p.54

4 徳島県の経済と産業 2016 (The Tokushima Prefectural Economy and Industry (Guide), 徳島：徳島経済研究所

5 http://www.kansai.gr.jp/mt51/plugins/KWInformation/news-search.cgi?__mode=detail&lang_code=en&id=4162 Accessed December 27, 2016.

6 http://naruto-uzushio.jp/activity/ Accessed December 27, 2016.

7 http://whc.unesco.org/en/decisions/1192/ Accessed December 27, 2016.

8 http://whc.unesco.org/uploads/nominations/870.pdf Accessed December 27, 2016.

9 http://whc.unesco.org/uploads/nominations/1449.pdf Accessed December 27, 2016.

10 http://whc.unesco.org/uploads/nominations/1418.pdf Accessed December 27, 2016.

11 Beatrice M. Bodart-Bailey ed. Kaempfer`s Japan. Tokushima Culture Observed. (Book 1, Chapter 7, The Japanese Sea and Its Two Whirlpools), (Hawaii: University of Hawaii Press, 1999) 55.

12 Yoshitaro Takenobu. *The Japan Year Book*. (Tokyo, 1887) 3.

13 Basil Hall Chamberlain and W.B. Mason. *A Handbook for Travellers in Japan including the whole empire from Yezo to Formosa*. (London, J. Murray, 1901) 428.

14 Welcome Society. *A Guidebook For Tourists in Japan*. (Tokyo, 1906) 177.

15 Hakurankwai Kyokwa. *Japan and her exhibits at the Panama-Pacific International Exhibition*. (Tokyo: Japan magazine, 1915) 320.

16 Japan Tourist Bureau. *Tourist*. Vol. 10. (Tokyo, 1922) 77.

17 Japanese Government Railways. *An Official Guide to Japan.* (Tokyo, 1933) 421.

18 Japan Tourist Bureau. *How to See Shikoku.* (Tokyo, 1947) 10.

19 Japan Tourist Bureau. *How to See Osaka, Kobe and Awaji Island.* (Tokyo, 1947) 25.

20 *New Japan*. vol 8. (Tokyo: Mainichi Publishing Co., 1955) 338.

21 Pacific Stars and Stripes. "Shikoku- remote and unspoiled- island of legend and

beauty." Oct 31, 1948.

22 Pacific Stars and Stripes. "Getting Away From It All." March, 6, 1956. 15.

23 Pacific Stars and Stripes. "Ancient Mysteries of Perilous Japanese Strait to be Studied." Tokyo: April 14, 1956.

24 Pacific Stars and Stripes. "Ship Capsizes, 11 Die." July 29, 1957.

25 Dr. Shodo Taki, *Japan Today.* (Tokyo: Society for Japanese Cultural Information, 1947)

26 Sir John Scott Keltie. Ed. *The Statesman`s Yearbook.* Vol. 43., London: MacMillan and Co, 1906) 1115.

27 T. Philip Terry. *Terry`s Japanese Empire. A Guidebook for Travelers.* (Boston: Houghton Mifflin Co., 1914) 632.

28 Japanese Government Railways. *Pocket Guide to Japan.* (Tokyo, 1925) 21.

29 Board of Tourist Industry. Japanese Government Railways. *Pocket Guide to Japan.* (Tokyo, 1935) 94.

30 Japanese Government Railways. *The Inland Sea.* 1932. P4.

31 Japan Tourist Bureau. *How to See Shikoku* (Tokyo, 1936)

32 Alexandar G. Findlay. *A Directory for the navigation of the North Pacific with descriptions of its coasts, islands etc., from Panama to Behring Strait and Japan; its wind, currents and passages.* (London: R.H. Laurie, 1870) 614.

33 Lieutenant Frederick W. Jarrad R.N. *The China Sea directory* (Vol IV) (London, 1873) 204.

34 A digital copy can be viewed at the UC San Diego Special Collections site: http://library.ucsd.edu/dc/object/bb1434643f

35 Findlay, 1870. 614.

36 Alexandar G. Findlay. *A Directory for the Navigation of the Indian Archipelago, China.* (London: R.H. Laurie, 1878) 1203.

37 Aime Humbert. *Japan and the Japanese – Illustrated.* (New York: D Appleton & Co. 1874) 7-8.

38 Elisee Reclus, Augustus Henry Keane, Ernest George Ravenstein. *The Earth and Its Inhabitants: Asia.* (New York: D. Appleton, 1891) 376.

39 Etienne de Villaret. *Dai Nippon.* (Paris: Ch. Delagrave, 1889) 336.

40 Joseph Henry Longford. *The Story of Old Japan.* (London: Chapman and Hall, 1910) 25.

41 R.A.B Ponsonby Fane LL.D. "Zoku Senmeiko-Nomenclature of the N.Y.K. Fleet Supplemented." Travel Bulletin, No. 116, 1935. 41.

42 Johann Justus Rein. *Japan - Travels and Researches Undertaken at the cost of the Prussian Government* (London: Hodder and Stoughton, 1884) 16

43 T. Philip Terry. 1914. 632.

44 U.A Casal. "Some Notes of the sakazuki and on the Role of Sake Drinking in Japan." *Transactions of the Asiatic Society of Japan* (Vol 19. Tokyo, 1939) 183

45 (Chapter 5 (p52-62) entitled "Near Disaster" in "Journey by Junk – Japan After MacArthur") and an article for the National Geographic ("The National Geographic" (Vol CIV, No. 5. Nov. 1953) under the title of "Cruising Japan`s Inland Sea – Voyaging American Brave Whirlpools and Tide Rips to Explore the Secluded Beauty of an Island World." (p619-650)

46 Journey by Junk. 54.

47 Journey by Junk, 55.

48 Near Disaster, 635.

49 Journey by Junk, 59.

50 Ibid 62.

51 Ibid 62.

52 Near Disaster, 621.

53 The Japan Daily Mail. Vol 1. (Tokyo: 1884) 488

54 Robert Gardiner. *Japan as we saw it.* (Boston: Rand Avery Supply Co 1892)3.

55 Ibid. 89

56 Henry Davenport Northrop. *The flowery kingdom and the land of the Mikado; or, China, Japan and Corea, containing their complete history down to the present time ... together with a graphic account of the war between China and Japan, its causes, land and naval battles etc etc.* (London, Ont. McDermid & Logan, 1894) 305.

57 *Up-to-date Guide for the Land of the Rising Sun: With Maps and Numerous Pictures.* (H. Hotta. Z.P Maruya & Co., Ltd. 1903) 305.

58 *The Netherlands and Japan – Japan of Today.* (Tokyo: Japan-Netherlands Society, 1914) 113.

59 Women`s Mission Association. "Preaching the Gospel in Japan." *The Grain of mustard seed, or, Woman's work in foreign parts.* No. 37. (London: R. Clay, September 1885) 130

60 Samuel Bickersteth. *Life and Letters of Edward Bickersteth. Bishop of South Tokyo.* (London: Sampson Low, Marston & Company. 1899) 192

61 H.B Tristram. *Rambles in Japan – The Land of the Rising Sun.* (London: The Religious Tract Society, 1895) 257

62 *New Japan* (Osaka: Mainichi Publishing, 1947) 97.

63 *Japan Visitor`s Guide* (Vol 4. No. 6, June-July 1959) 65.

64 Tourist Industry Bureau ed. *Official Guide of Japan*, (Tokyo: Japan Travel Bureau, 1961) 815.

65 Japan National Tourist Organization. *The New Official Guide to Japan,* (Tokyo: Japan Travel Bureau, 1966) 880.

66 *New Japan* (Osaka: Mainichi Publishing, 1970) 217.

67 Japan National Tourist Organization. The New Official Guide to Japan, (Tokyo: Japan Travel Bureau, 1975) 814.

68 https://www.japansociety.org/resources/content/9/7/8/documents/CentBook.01-57.pdf) Accessed: December 27, 2016.

69 Japan Society November 25, 1925 News Bulletin. 1

70 Shigeru Kusano ed. "Tokushima Prefecture – That Spectacular Naruto Whirlpool", *The Seto Inland Sea – Japan`s World Famous National Park,* (Kobe: Okamura Printing Ind, 1953)

（徳島大学）